

木澤
成肅
編纂

小學
初等
修身
幼訓

卷二

東
洋

一

大日本教育會館			
第三室		第一	
二	二	四	五
七	九	架	冊
九	四		
冊	號		

自

函

架

號

K110.1

47

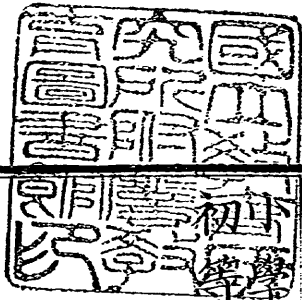
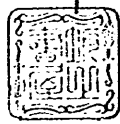
2

木澤成肅編纂
蒲生重章校閱

卷一

小學
修身多訓
初等

明治十五年三月廿八日版權免許

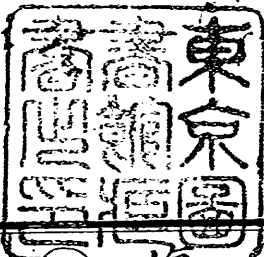


修身幼訓卷之二

木澤成肅編纂
蒲生重章校閱

第四

○身體髮膚之を父母に受く、敢て毀
傷せざるは、孝の始なり 孝經
○身を立て、道を行ひ、名を後世に揚



げ、以て父母を顯すは、孝の終りなり
孝經

○人の心を知りて後に交るべし、心
を知らずして友とすれば、或は後より
悔る事あり 大和俗訓

○大禹は、聖人なるに、乃寸陰を惜む
衆人に至りては、當に分陰を惜むべ

陶侃ノ格言

○書は熟讀すれば、記憶することを得べし、
義理は細思すれば、精きに至るべし 朱子ノ格言

○有志の士は、利刃の如し、百邪辟易
す、無志の人と、鈍刀のごとく、童蒙侮
翫す 言志録

○君子は、理に循ふて、常に舒泰なり、
小人も、物に役せられて、憂多し

程子ノ格言

○積て而して能く散ずれば、富以て
保つべきなり、過つて而して能く改

むれば、徳以て進むべきなり

尾藤二洲ノ格言

○人と論ずるは、須らく容貌從容、言
語温厚なるべし、決して劇烈なるべ

からず 紳瑜

○富貴は、天のあたふる所にあらず、
人の勤め行ふ所なり

大内正恒ノ遺訓

○吾嘗て終日食はず、終夜寝ずして
以て思へども益なし、學ぶに如かざ
るなり 論語

○君子は本を務む、本立て道生ず、孝

弟は、それ仁を爲すの本なるか 論語

○飽食暖衣、逸居して教なきときは、

禽獸に近し 孟子

○陽氣の發する所は、金石も亦透る、

精神一たび到らば、何事か成らざら

ん 朱子ノ格言

○嘉肴ありと雖も、食はざれば、其旨

きことを知らず、至道ありと雖も、學

ばざれば、其善きことを知らず 禮記

○忠信を主とし、己に如かざるもの

を、友とすることなく、過ちては、改む

るに憚ること勿れ 論語

○凡る天地父母主君聖人の恩は、相

並びて重し、此四恩を忘れ背くは、人

にあらざ 大和俗訓

○其心厚き者は、其福厚し、其量弘き者は、其徳弘し、日計足らざれども、月計餘りあり 畜徳録

○學問の道、敢て自からは是なりとせず、虚くして以て人に受れば、自から得ることあり 朱子ノ格言

○書を觀ること、一卷なれば、一卷の益あり、書を觀ること、一日なれば、一日の益あり 倪文節ノ格言

○人を犯さばることは易く、人の我を犯せども、報ひざること 大和俗訓 難し

○人其過を知らざるを患ふ、既に之を知りて、改むること能はず、是れ勇

なきなり 韓退之ノ格言

○凡そ諸の事、大小となく、専らに行ふことを得る母れ、必ず家長に咨稟

せよ 司馬溫公ノ格言

○内に徳を積み、外に一藝をたしなむ、其名顯れずと、いふことなり 藤原公重ノ遺訓

○人已が心を存する時は、萬に謬ま

りなし、心を存せざるにより、歎きも

憂ひも、あるものなり 清原良枝ノ遺訓

○人已が智を善しとし、他人の智を惡し、とす、此人一生に智至る事な

し 藤原持通ノ遺訓

○君子は義以て質と爲し、禮以て之を行ひ、遜以て之を出し、信以て之を

成す君子なるかな 論語

○凡る人の人たる所以の者は、禮義なり、禮義の始は、容體を正ふ、顔色を齊へ、辭令を順にするに在り 禮記

○我に誠ある時は、もろくの人皆わが兄弟なり、我誠を失へば、兄弟の間も敵とならん 貞信ノ室照子ノ嘉言

第五

○人の誠を爲す事は、天地神明に通じて、萬の人、是を仰ぐ 藤原秀卿ノ遺訓

○賢を見ては齊くからんことを思ひ、不賢を見ては、内に自省る 論語

○人の善を聞ては、心を進め、人の惡を聞ては、心を退く、之を道に進むと

いふなり

伊勢守繼蔭ノ女慶子ノ嘉言

○勝事ばかり知りて、負る事を知らざれば、害その身に至る 徳川家康ノ遺訓

○事に敏にして、言に慎み、有道に就きて正す、學を好むといふべきのみ

○盤根錯節に遇はざれば、利器を分論語つことなし、此れ吾が功を立つるの

秋なり

後漢虞詡ノ格言

○幼にして、肯て長に事へず、賤にして、肯て貴に事へず、不肖にして、肯て賢に事へず、三の不祥なり 荀子

○善人を見て、之に效ひ、不善人を見て、之を改む、善と不善と、皆吾が師なり 傳家寶

○人に交るは、厚きを旨とす、厚きと
きは、人を責めずして、我を責むるな
り 大和俗訓

○天の未陰雨せざるに追んで、彼粟
土を徹りて、牖戸を綯繆す 詩經

○志士仁人は、生を求めて、以て仁を
害することなく、身を殺して、以て仁

をなすことあり 論語

○劣れる人を見て、己が戒とし、業に
とくし、物にうやくし、き人を見て、己
が師とすれば、身終るまで、心よかる
べし 順徳院女房兵衛佐ノ遺訓

○君子は、先づ擇て而後に交る、故に
尤寡し、小人先づ交て、而後に擇ふ、故

に怨み多し — 文中子ノ言

○事最も、輕忽にすべからず、至微至小なる者と雖も、皆當に、慎重を以て、之を處すべし — 明薛文清格言

○孝子の深愛ある者は、必^ス和氣あり、和氣ある者は、必^ス愉氣あり、愉氣ある者^ト、必^ス婉容あり 禮記

○男子は内に文字有りて、人のうわさの善惡をいはず、みだりに怒ることなきを、第一とはいふなり 太政大臣實敦ノ女後法成寺閑白ノ室維子ノ嘉言

○人を愛して、親ま^ズんば、其、仁に反れ、人を治めて、治ら^ズんば、其、智に反れ、人を禮して、答へ^ズんば、其、敬に反れ 孟子

○下を用て、上を敬ふを、之を貴きを
貴ふと謂ひ、上を用て、下を敬ふを、之
を賢を貴ふと謂ふ 孟子

○自ら敬すれば、人之を敬す、自ら慢
れば、人之を慢る、心口一の如き、忠信
となし、心口一ならず、忠信に非るな
り 讀書録

○積て能く散ずれば、富以て、保つべ
きなり、過て能く改むれば、徳以て進
むべきなり 尾藤二洲ノ格言

○父母子を愛するの心、未嘗て少
も置かず、人子父母を愛するの心、亦
當に跬歩も忘れざるべし 朱晦菴ノ格言

○凡そ兒童は、須らく是衣冠整齊、言

動端莊なるべし、廉恥の二字を識り

得れば、自然に正大光明の氣象あり

言行彙纂

○孝子の老を養ふや、其心を樂ま

ぬ、其志に違はず、其耳目を樂ま

ぬ、其寢處を安んじ、其飲食を以て、之に

忠養す 曾子ノ格言

○人の恩を受けて、負くに忍ざるも

のは、其子たる必ず孝なり、臣たる必

ず忠なり 司馬温公ノ格言

○暴虎憑河し、死して悔ゆることな

き者は、吾は與にせざるなり、必ずや

事に臨んで懼れ、謀を好んで成さん

ものなり 論語

○一介の士知己に遇ふを得れば、恩

に感上、報を思ひて、軀を捐る、況や君臣の大義をや、故に君に事へ身を致すは、臣道の當然なり 習是編

○當に君を愛するは、父を愛するが如く、國を愛するは、家を愛するが如く、民を愛するは、子を愛するが如くなるべし 宋羅豫章ノ格言

○親の子を慈愛するには、道藝を教へて、子の才徳を成就するを本とす、當坐の苦身をいたはりて、子のわがまゝに育てぬるを、姑息の愛といふ 翁問答
○益者三友、損者三友、直を友とす、諒を友とす、多聞を友とするは益なり、便辟を友とす、善柔を友とす、便佞を

友とするは損なり 論語

○悪き人に交るべからず、善人に交るべし、古人のいひし、花中の鶯は、その聲、花ならねど、馨しといへる事も、この謂にや 藤原公行ノ遺訓

○物れろそかにして、己を慎むのこ
となく、金玉身をかざり、恣なるも、過

ちのはじめなり 權大納言和長女管内侍ノ嘉言

○驕れる人をみて、己を戒とし、事に
とくし、物にうやくし、き人を見て、己
が師とすれば、身終るまで心善るべ
し 順徳院女房兵衛佐ノ嘉言

○善を見聞てはよろこび、悪を見聞
てはねそれつゝ、むものは、今世に

生れて賢人とやいはん、善惡同ふ
て危きを招く人のみなり 菅原長直ノ遺訓

第六

○善人は、貨を用ひて人を助け、國の爲にす、愚なるものは、貨を用ひて人を傷ひ、家を破り、己を失ふ 菅原爲清ノ遺訓

○孝行の條目、數多ありといへども、

畢竟は二箇條に約まれり、第一には、父母の心を安穩なるやうにするなり、第二には、父母の身をよく敬ひ養ふなり 翁問答

○猫は鼠を取をもて愛せられ、犬は賊をふせぐにより、人は是をやいなふ人として、敬と義なき時は、何をとら

んや、用なきの身を愛して、生んより、
はやく死なんこそよけれ 藤原隆康ノ遺訓

○人を敬ひ、人を親むに、人我をうや
まはずば、己を顧みよ、いまだ我敬と
親との足らぬと志りて、人を咎めつ
ることなかるべし 源俊量ノ遺訓

○人は孝行あるを第一とす、智惠秀

て世渡る事の善きものも、孝と忠と
は、なきものあり、恥べき事にこそ 藤原濟繼ノ遺訓

○三綱とは何の謂ぞや、君臣父子夫
婦を謂ふなり、君は臣の綱たり、父は
子の綱たり、夫は妻の綱たり 白虎通

○人の私語を見ては、耳を傾て竊に
聴くこと勿れ、人の私室に入りては、

目を側て旁觀すること勿れ 願體集

○忠恕道を違ふこと遠からず、諸を己に施して願はずんば、亦人に施すこと勿れ 中庸

○世に接はるには、和して流れざるを善とす、和すれば人に背かず、流れざれば道を失はず、是世に接はる

よき程の中道なり 大和俗訓

○人の心はよく移るものなり、かゝるに賢には移りがたく、悪には移りやすし、悪人といへども、賢なる事はこのみて、悪なる事はきらへり

○家を興すも子孫なり、家を破るも

子孫なり、子孫に道を教へずして、子

太政大臣實敦ノ女圓子ノ嘉言

孫の繁昌を求むるは、足なくして、行くことを願ふにひと翁問答

○吾未だ財に畜よして、能く善を爲す者を見ざる也、吾未だ誠あらずして、能く善を爲す者を見ざるなり、

程子ノ格言

○君子の學は、必ず日に新なり、日小新なる者は、日に進む也、日に新なら

ざる者は、必ず日に退く、未だ進まずして、退かざる者は有らざる也同上

○餘り有るを待て、人を救はば、必ず人を濟ふの日なく、暇あるを待て、書を読まば、終に書を読むの時なく紳瑜

○凡そ百事の成るや、必ず之を敬するに在り、其敗る、や、必ず之を慢る

に在り、故に敬怠に勝てば吉なり、怠敬に勝てば凶なり 荀子

○富貴の家に、貧賤なる親戚の出入するは、主人仁愛の厚きこと顯れ、其家の榮譽なり、然るに或は之を恥る者あり、豈誤りならずや 家道訓

○學は思ひに原づく、と雖ども、間思

ふに尤^て道あり、遠ざくれば恨み、近づくれば慢どる、仁愛を以て、之を懐け、禮法を以て、之を正すべし 家道訓

○事は勉強に在り、勉強して學問すれば、聞見博くして、智益明なり、勉強して道を行へば、徳日に起りて大に功あり 董仲舒ノ格言

○書は誦を成さざるべからず、或は馬上にあり、或は中夜寐られざる時に在りて、其文を詠じ、其義を思へば得る所多し

司馬溫公ノ格言

○學を爲すには、先づ須らく志を立てべし、志既に立てば、學問次第に力を著くべし、志を立てること、定まらざ

れば、終に事を濟さず

朱子ノ格言

○奴婢を使ふこと、誠に難し、之を使ふ、雜慮甚し、心術に害あり、學者須らく胸中をして、泰然事なく、以て有用の思慮應接を待つべし

貝原益軒ノ格言

○學者身を奉ずるに、華侈を好むべからず、苟も華侈を好めば、必ず貪り

得ることを致す、他日官に居り、決して清白なること能はず 章文懿ノ格言

小學修身幼訓卷之二終

明治十五年三月廿八日版權免許
同 十五年五月 出版

定價八錢

編纂人

東京府士族

木澤成肅

下谷區下谷西町壹番地

出版人

同 士族

辻謙之介

本郷區本郷元町壹丁目六番地

出版人

同 平民

阪上半七

日本橋區吳服町十二番地

發兌人

同 平民

北畠茂兵衛

同區通壹丁目



水澤成肅編纂

小學初等修身幼訓

卷三

東新

吹	本	教	育	會	書	館
第	二	第	二	第	二	第
四	二	四	二	四	二	四
函	架	架	架	架	架	架
五	四	四	四	四	四	四
冊	號	號	號	號	號	號

百一第

K110.1
49
3